

石井鶴三と石原純『鬢日』

——新出石井鶴三宛石原純書簡から

松本和也（神奈川県立外国語学部）

一、はじめに

石井鶴三（一八八七～一九七三、洋画家・彫刻家・挿絵画家）と文学者の関係という問題領域に関して、第一にあがるものとして、挿絵画家としての鶴三が、新聞連載小説などに挿絵を提供するかたちでの協働作品がある⁽¹⁾。他に、鶴三は雑誌へのカットや挿画の寄稿、書物の装幀等も手がけた⁽²⁾。

本稿で注目するのも、石井鶴三と文学者の関係ではあるが、相手は小説家ではなく、歌人、そして提供したのは挿画である。具体的にいうならば、石井鶴三による挿画が二葉収められている、石原純の第一歌集『鬢日』（アルス、一九二二）を検討対象としたい。その上で本稿では、信州大学所蔵「石井鶴三関連資料」から新資料として発見された、右の書物に関わる石井鶴三宛石原純書簡二通を紹介しながら、関連情報を補いつつ、石井鶴三と石原純の関係について、少しく考察をめぐらせてみたい。

それに先立ち、差出人・石原純について確認しておこう。

石原純 いしはら・じゅん

理論物理学者 歌人 ④明治一四年一月一日 ⑤昭和二二

年一月一日 ⑥東京府本郷区（現・東京都文京区）本名Ⅱ石

原純（いしはら・あつし） 歌名Ⅱ石原阿都志（いしはら・あつし） ⑦東京帝大理科大学理論物理学科（明治三九年）卒

理学博士（大正五年） ⑧帝国学士院恩賜賞（大正八年） 「相対性理論、万有引力論及び量子論の研究」 ⑨大学時代は理論物理学を専攻。明治三六年「馬酔木」創刊を機に伊藤左千夫を訪ね、後に「アララギ」に参加。四四年東北帝国大学助教授に就任。四五年～大正三年までヨーロッパ留学をし、なかでもアインシュタインに大きな刺激を受ける。大正三年帰国後東北帝大教授となる。現代物理学の理論的基礎や方法の啓蒙的解説も精力的に行う。一〇年歌人・原阿佐緒との恋愛事件により教授を辞任。以後、著作、啓蒙活動に専念。昭和七年岩波「科学」創刊とともに編集主任となる。大正一一年歌集「鬢日」（あいじつ）を刊行、都会感覚と科学者としての詩情で注目された。昭和二年「渦状星雲」を創刊したのをはじめ、九年「立像」を創刊、「立像」は後に「新短歌」と改組された。歌論でも「新短歌概論」などを執筆、科学者としても「自然科学概論」「現代物理学」「アインシュタインと相対性原理」「相対性原理」などの著書があり、「アインシュタイン全集」（全四巻）もまとめた⁽³⁾。

つまり、石原純とは、科学者であると同時に歌人でもあり、こと

一九二二年前後は重要な出来事が重なってもいた——《石原純個人の年譜》を見て、『燬日』刊行前後は、原阿佐緒との恋愛事件とそれに伴う大学退職、アララギ脱会、アインシュタインの来日講演に通知として随行するなど、人生の大転換期に当たっている⁴のだ。こうした時期——一九二二年五月一〇日に、『アララギ』時代の歌⁵、ことに《仙台（東北帝国大学）に行つてからの作品ばかり》⁵を取めた『燬日』は刊行された。

なお、石井鶴三と石原純（の関係）について、この後紹介する書簡以前に、直接的な交流は、管見の限り確認できなかった。

二、新出書簡二通

石原純と石井鶴三の関係が、具体的な形で世に示されるのは、石原純がアララギ叢書第一四編として刊行した、第一歌集『燬日』（アルス、一九二二）に、鶴三が挿画を寄せたことによる。

『燬日』公刊の動機については、同書の「序」において、石原純が次のように述べている。

歌集を出版することに就て私はこれまでいろいろの人たちからのお奨めを受けたことも随分ありました。齋藤茂吉君などは特に消息のついでに屢々それを言うてくれました。けれども私がいつも忙しくてこれまでの歌をまとめるだけの暇がなかつたことや、又自分の作に不満足なものをかなり感じてゐたことや、従つてそれほど価値もない歌集をむりに世に出したところで意味のないことであるといふ感じや、それらの事情が私をして自分の歌集を出さうと決心することに多くの躊躇

踏を感じさせました。併しかなりの年数も経ち、雑誌に発表した歌の数も大分たまつて見ますと、世のなかの人たちへの気づかひは措いて自分だけのことを真実に思ひめぐらした上では、従来の作のうちから自分の現在の心もちにてらし合せて多少なりとも満足に近いものを採り出して置いて見たくもあり、また散らばつてゐるものを一つに纏めて自分のその時々を省りみ、それを親しい人たちにも見て頂いてその感想をも聞き自分の省察の一助にしたくもあり、そしてそのなかに幾分の価値が見出されるならば望外の幸であるとも思ふやうになりました。斯う云ふ折から丁度昨年の晩秋にこの土地へ来て静かなしめやかな生活に入つたとき、「アルス」の鎌田敬止君が訪ねて来られて出版のことを頻りに相談せられたものでしたから、私もとうとうその気に惹かれてそれを承諾するやうになつたのでした。⁶

こうして、一書にまとめることを決めた石原純は、そこに、自作の集積・出版にとどまらない意義を託そうとしてもいた。引き続き、「序」を読み進めてみよう。

私は自分のこの歌集のなかにひろく示すに値しないたくさん欠陥を含んでゐることを深く虞れます。それにも拘らずこれを手にして頂く人々に対して、その芸術愛好のこゝろを保たせたい希ひから、私たちの尊敬する方々にそのお力ぞへを仰ぎました。この意味で挿画をお願いしました平福百穂、森田恒友、山本鼎、石井鶴三、小杉未醒の諸氏に対して、その執筆の御厚情を深く感謝します。また同じ意味でこの集の装釘を親し

くして下さい。津田青楓氏に対しても衷心からの感謝を捧げたいと思ひます。それらのお蔭で私のつたない歌がどんなに美しく装はれたかわかりません。⁽⁷⁾

つまり、挿画・装釘に意を尽くした書物とすることで、その出版の意義を高めたい、というのが石原純の企図だったのだ。実際、刊行された『鑿日』の広告にも、そのことは反映されていく。

『読売新聞』（一九二二・六・四、一面）に掲載された『鑿日』の広告では、「理学博士 石原純氏著／歌集 鑿日」という情報に添えて、「装幀 津田青楓氏 純情敬虔の一大歌集」と謳われ、挿画を書いた「平福百穂氏、小杉未醒氏、森田恒友氏、石井鶴三氏、山本鼎氏」の名も記される。その上で、次のような書物紹介文が添えられた構成となっている。

学界の世界的権威たる石原博士は一面に於て純情敬虔な歌人である。本書は氏の全作中より八百余首を採録せるもので人生ありのまゝの直観的体験、常住生活の姿がおのづから自由に豊富にあらはれてゐる。温情のこもつた、云ひ知れぬ懐しさをもつた著者の人としての深い根柢から生れたこれらの歌は読者に深い感銘を与へずにはおかぬ

本稿で紹介したいのは、この際に石井鶴三が描いた二枚の挿画についての、依頼とお礼の書簡である。

一通めは、文字通り鶴三宛、挿画依頼状である。版元のアルス関係者経由でか、すでに鶴三が挿画執筆を承引した後の、そのことに対する挨拶を兼ねたお礼状と思われる（画像1参照）。

1、石井鶴三宛石原純書簡（仮番号「書3—30」）

拝啓

こんど私の歌集を出すにつきまして、挿画をお願いいたしました。ふだん御いそがしい処を、まことに恐れいたします、私のさゝやかな歌集もそれによりてどれ程か風情をゆたかにし得ることと楽しみに思つてをります、厚く御礼を申しあげます

あたゝかい春雨のふる夜です、海辺のしづかな町に蛙のこゑを聞きふけつてをります、

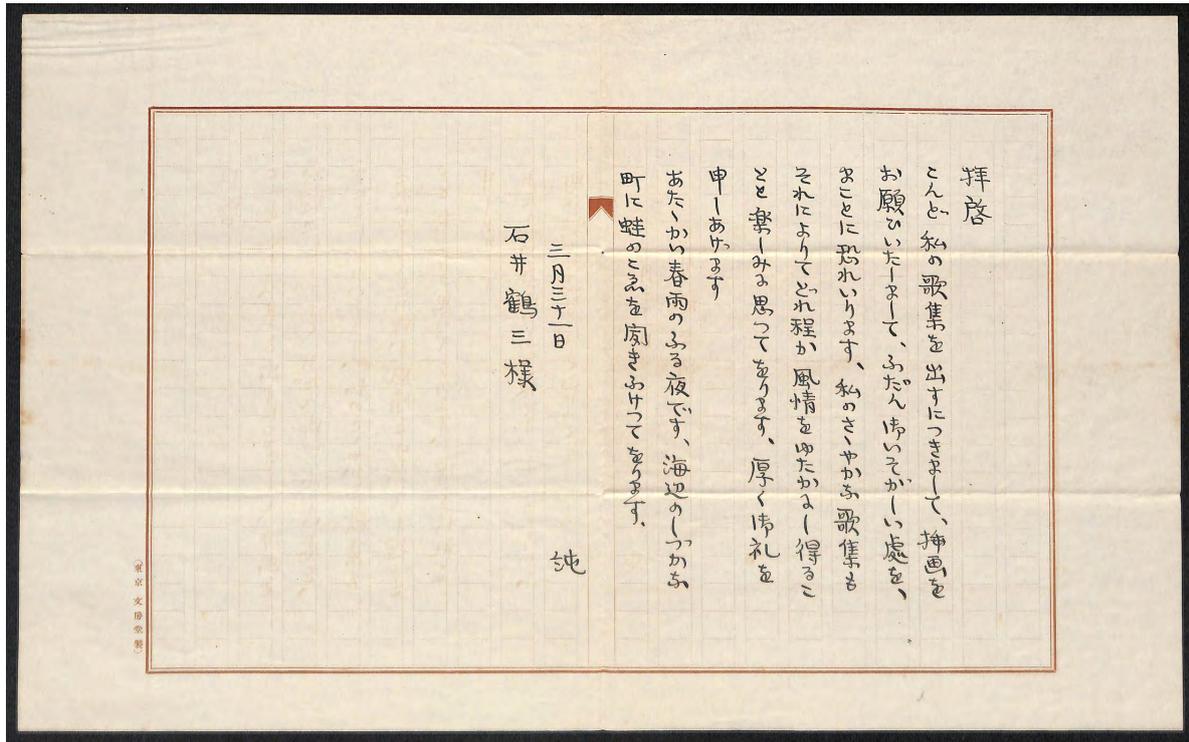
三月三十一日

純

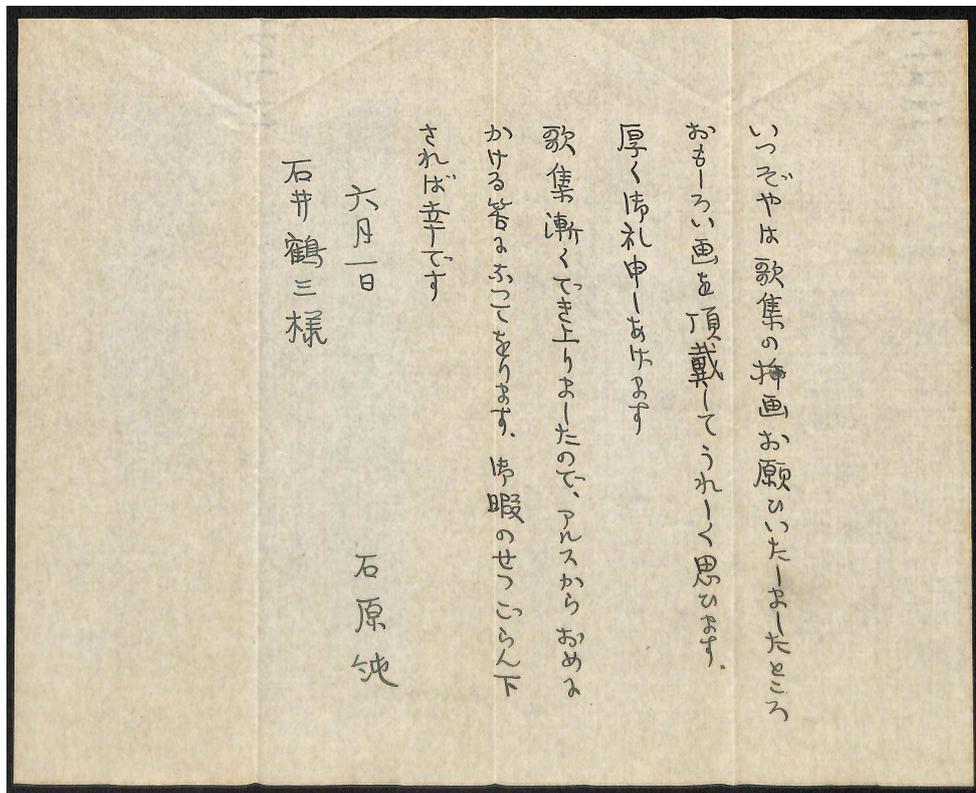
石井鶴三様

宛先は「東京府下、板橋字中丸／石井鶴三先生」、差出人は「千葉県安房郡保田町／石原純」、消印の日付は一九二二年四月一日、時間、発信地は読みとれない。なお、右の文面は、東京文房堂製の原稿用紙に書かれている。

鶴三の挿画に「風情」を求めている依頼だったことが読みとれる内容だが、お礼につづく、末尾二行の近況報告自体も、歌人らしくというべきか、地方色に彩られた「風情」を添えたものとなっている。出版スケジュールからすると、石原純・書誌サイドからの挿画依頼が終わり、承引した鶴三が構想・執筆をしていた時期の書簡ということになるだろう。



画像1 / 仮番号：書 3-30 石井鶴三宛石原純書簡（1922.3.31.）



画像2 / 仮番号：書 3-29 石井鶴三宛石原純書簡（1922.6.1.）

二通めは、鶴三からの挿画を受け取つて後、『鬚日』刊行前後の
 ものである（画像2参照）。

2、石井鶴三宛石原純書簡（仮番号「書3—29」）

いつぞやは歌集の挿画お願いいたしましたところ
おもしろい画を頂戴してうれしく思ひます。

厚く御礼申しあげます

歌集漸くでき上りましたので、アルスからおめに
かける筈になつてをります、御暇のせつごらん下
されば幸です

六月一日

石原純

石井鶴三様

封筒表面の宛先は「東京市外、板橋字中丸／石井鶴三様」、差出人は「安房保田町／石原純」、消印の日付は一九二二年六月一日、時間、発信地は読みとれない。封書裏面には、「三越特製」の朱印入り。

まず、『鬢日』刊行時期について検討しておく。『鬢日』の奥付は、「大正十一年五月十日発行」となっている。ただし、すでに引いた『鬢日』の新聞広告が出たのが六月四日付け朝刊、右の書簡も六月一日付けのものである。また「歌集漸くでき上りました」という石原本人の言い回しも、刊行が当初の予定より遅れたことを示すものにみえる。以上を総合すると、実際の刊行は六月上旬だったと推測される。そう考えれば、右のお礼状兼送り状は、『鬢日』刊行日が具体化した早い時点での書状だと考えられる。

なお、鶴三による挿画自体については、「おもしろい画」と評しており、石原にとっても好ましいものであったことがわかる。

三、『鬢日』の鶴三挿画

最後に、書物としての石原純『鬢日』について検討しておく。歌集『鬢日』は、『アララギ時代の総決算』⁸とも評され、それは同時に《これを最後に、定型を超えた自由形式の短歌を提唱し、新短歌運動を開始する》⁹ターニングポイントでもあったという¹⁰。

さて、『鬢日』は「序 歌集に関することども」につづいて、其一〜其四の四部構成となっている。其一として、「信濃の歌・続信濃歌」という題の下、歌が配列されている。其二は「学究・平日」、其三は「みちのく・よそぐに」、其四は「欧垂行」といった具合である。

ちなみに、『鬢日』に関わった画家は総勢六名で、挿画二枚を描いた鶴三の他、挿画を一枚描いた平福百穂（松島）、森田恒友（伊豆湯ヶ島にて）、小杉未醒（アルプスの山）、挿画を二枚描いた山本鼎（イルクーツクにて、霧のラームス）、それから紅木蓮を掲げた装幀の津田青楓である。このメンバーの大半は、一九二二年一月に創立され、鶴三も招かれて客員となった、春陽会¹¹（発起人：足立源一郎、小杉未醒、倉田白羊、森田恒友、梅原龍三郎、山本鼎）から輩出されており、『鬢日』への鶴三起用も、アルス経由の他、春陽会ルートからの依頼とも考えられる。

鶴三挿画の第一は、其一「信濃の歌」に配置された「八ヶ岳の裾野」¹²（二頁）である（画像3参照）。

鶴三挿画の第二は、其二「学究」に配置された「研究室」¹³（五六頁）である（画像4参照）。これは、物理学者としての石原純の肖像画であり、書物中で唯一著者をモデルとした絵でもある。



画像4 / 研究室



画像3 / 八ヶ岳の裾野

してみれば、『鬢日』とは、歌人・石原純の第一歌集であるばかりでなく、この時期、春陽会をたちあげた芸術家のサポートを得ながら上梓された、いわば、高級芸術^{ハイ・アート}を目指した書物だったといえそうである。しかも、そうした書物づくりに、石原純自らが関わっていたことが、本稿で紹介した鶴三への依頼状・お礼状から明らかにもなった。

これを、石原純側からみるならば、自ら企図していたように、言葉からなる歌集に、積極的に絵を取り入れ、そのことによって書物全体の芸術的感興を高めることに成功した、ということになるだろう。

逆に鶴三側からみるならば、挿絵や挿画、装丁等々、仕事の幅を広げる中で、の歌人との協働作品^{コラボレーション}であるばかりでなく、春陽会メンバーとの競演・協働作品ともなった。そうした意味で、心地よい緊張感のある仕事であったと思われるが、さらに、石原純の学者としての相貌を挿画として描いたことも、大きな意味をもったと推測される。というのも、学者・石原純の肖像は、おそらく芸術家・石井鶴三の肖像でもあったのだから。

どうということか。

実作ばかりでなく、エッセイ・評論も多く書いた鶴三は、芸術に真摯に打ちこむ芸術家としての信念を繰り返し言明し、実際、そのように評価されてもいった芸術家である^②。その際、真摯な芸術(家)の根拠は、(ループを描くようにして)芸術に真摯に打ちこむ自己(芸術的・学術的・人格的向上を目指す自己)の他ではなく、その意味で、自画像とはそのループ自体の表象でもあり、さらにこの表象は当のループ自体の加速装置ともなり得る。

もとより、『鬢日』に際して鶴三が描いたのは、学者・石原純に

は違いないのだが、そこには、学者肌ともいえるアプローチで芸術への精進を實踐していた鶴三の理想の自己像が重ねられてもいたように思われる。それはもちろん、「研究室」にも反射し、石原純にも真摯な学究の徒としての表象がもたらされていく。

してみれば、『鑿日』上における挿画二枚というかたちで関わった石井鶴三と石原純とは、歌と絵をもちよるといふ表面的な関係以上の相互触発・相乗効果を、水面下において果たしていたように思われてならない。「おもしろい画」という石原純の言葉に、そこまでの含意を読みとるのは、深読みにすぎないだろうか。

注

- (1) 本稿と重なる時期に関して、荒井真理亜「上司小剣「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から」（『信州大学附属図書館研究』二〇一三・一）、同「上司小剣『東京第一部 愛欲篇』の制作状況——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から」（同前、二〇一四・一）、同「上司小剣『東京第二部 労働篇』の出版とその後——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から」（同前、二〇一五・一）、拙論「大正末における石井鶴三と中里介山の関わり——雑誌『婦人之友』と『小野の小町』挿絵をめぐる」（『信州大学附属図書館研究』二〇一三・一）他参照。
- (2) 一九二二年、鶴三は弘田龍太郎作曲・北原白秋詩『童謡楽譜 ほうほう蛭』（アルス、一九二二）の装丁を手がけ、挿画二三点を描いてもいた。『鑿日』と同一の版元であり、これが『鑿日』での仕事に繋がった可能性も考えられる。なお、カットに関する先行研究として、多田蔵人「挿画々家」と中央公論社——石井鶴三宛嶋中雄作書簡から」（『信州大学附属図書館研究』二〇一三・一）参照。
- (3) 日外アソシエーツ編『詩歌人名事典 新訂第二版』（日外アソシエーツ、

二〇〇二）、六四〜六五頁。

- (4) 石川美南「石原純 若手歌人による近代短歌研究（終）」（『短歌』二〇一三・一〇）、二〇七頁。

- (5) 西尾成子『科学ジャーナリズムの先駆者 評伝石原純』（岩波書店、二〇一〇）、一〇三頁。

- (6) 石原純『鑿日』（アルス、一九二二）、五〜六頁。

- (7) 注(6)に同じ、九〜一〇頁

- (8) 注(4)に同じ、二〇六頁。なお、併せて、矢島祐利『アララギ』時代の石原純（『ももんが』一九八二・七）参照。

- (9) 注(5)に同じ、一八九頁。なお、併せて、紅野謙介「石原純とは誰だったのか——パネル発表の報告と課題——」（『日本近代文学』二〇〇九・五）参照。

- (10) 注(4)で石川は、『石原純はなぜ新短歌へと移行したのか。要因は幾つかある。文語定型の歌のみを取めた『鑿日』も、句読点や多行書きを採用していたり、一首一首の独立性が曖昧な大連作があったりと、自由な形式を求める気配はあった。また、当時は、反アララギ、口語（かつ／または）自由律の気運が高まっていく時代でもあった。（二〇七頁）と論じている。

- (11) 鶴三と春陽会の関係については、高野奈保「赤い鳥社主催「自由画大展覧会」と鈴木三重吉——石井鶴三宛三重吉書簡から見えるもの」（『信州大学附属図書館研究』二〇一五・二）も併せて参照。

- (12) 拙論「石井鶴三宛書簡の整理をはじめ——挿絵（画家）から近代文学・出版（研究）を考え直すために」（『信州大学附属図書館研究』二〇一二・三）、同「挿絵画家・石井鶴三とその評価」（『信州大学附属図書館編『時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三』展・資料集』信州大学附属図書館、二〇一二）参照。

※石井鶴三宛書簡等に付した仮番号は、「石井鶴三関連資料」の整理・保存用に、信州大学附属図書館が付与したものである。翻刻に際しては、漢字は現行の字体に改め、改行は原文に従った。

※本研究はJSPS 科研費16K02420の助成を受けたものである。